

乳児血管腫の診かた・考えかた ——後遺症を残さないために



小関道夫（岐阜大学大学院医学系研究科小児科学臨床准教授）

本コンテンツはハイブリッド版です。PDFだけでなくスマホ等でも読みやすいHTML版も併せてご利用いただけます。

▶ HTML版のご利用に当たっては、PDFデータダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶ シリアルナンバー付きのメールはご購入から3営業日以内にお送り致します。

▶ 弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することでHTML版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は <https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/> をご参照ください。

▶ 登録手続

summary	p2
はじめに	p3
1. 乳児血管腫ってどんな病気？	p4
2. 典型例の経過は？ 本当に消える??	p5
3. 間違えやすい「その他の血管腫」とは？	p8
4. 治療すべき血管腫とその治療法とは？	p10
5. 保護者への説明	p18

▶ 販売サイトはこちら

日本医事新報社では、Webオリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶ Webコンテンツ一覧

summary

1 乳児血管腫ってどんな病気？

- ・乳児血管腫とは、乳児期によくみられる皮膚の良性腫瘍である。見た目が「イチゴ」に見えるため「イチゴ状血管腫」と呼ばれている。
- ・かつては、自然に消えるため「wait and see policy」と教科書に書かれていた。しかし、一部の症例では重篤な症状を起こしたり、後遺症を残したりする場合があるため、最近では非選択的 β 遮断薬であるプロプラノロール内服（2016年に保険適用）を第一選択薬として積極的に治療することが、ガイドラインにおいても推奨されている。

2 典型例の経過は？ 本当に消える??

- ・乳児血管腫は生後数週で赤みが出現し、5～8週で急速に増大する（増殖期）。その後、赤みが落ちつき、縮小しはじめ、4歳をめどに退縮するとされる（退縮期）。しかし、多くの症例が完全に「消える」ことはなく、何らかの瘢痕を残すことが多い。

3 間違えやすい「その他の血管腫」とは？

- ・同じ乳児期に起こる「その他の血管腫」と混同しないように、これらの性状や出現時期、典型的な経過を知っておくべきである。

4 治療すべき血管腫とその治療法とは？

- ・主な治療法はプロプラノロール内服、パルス色素レーザーである。重篤な症状（眼や気道など重要臓器への影響、出血、潰瘍など）を呈する場合や、醜形を残すことが予想される場合は、積極的に治療する。

5 保護者への説明

- ・保護者には「消える」とは言わず、「痕が残ることが多い」と説明するこ

とが望ましい。その上で治療適応を見きわめ、必要な場合は専門病院に紹介する。

はじめに — 乳児血管腫の現況

「皮膚の血管腫が薬で小さくなる」という事実に驚く医師は少なくない。2008年に、先天性心疾患のある乳児に対し非選択的 β 遮断薬であるプロプラノロールを投与したところ、顔にあった乳児血管腫 (infantile hemangioma: IH) (いわゆるイチゴ状血管腫) が消えたことで、その画期的な治療法は発見された。まさに偶然の産物、セレンディピティである。その後、瞬く間に世界中で治療効果が検証され、その高い効果が示された。わが国においても治験が実施され、2016年にIHに対する治療薬として薬事承認された(商品名:ヘマンジオル[®], マルホ)。

ところが、IHに対する薬物療法はおろか、いまだ「自然に消えるから放置すればよい」と説明する医師が多いのが現状である。最近ではSNS上で患者家族の「小児科では経過観察と言われたが、皮膚科ではすぐに治療すべきだと言われた」という投稿に対し、皮膚科専門医を中心に100万閲覧を超え、小児科医、皮膚科医などから「安易な経過観察はやめよう」「治療すべき血管腫とは？」などのコメント、投稿が多数あった。血管腫という疾患は、IH以外にも様々な種類があり、非常にありふれたものであるが故に、注目もされやすい。しかし、肝心な正確な情報が少ないため、多くの誤解や混乱をまねいているものと考えられる。

本稿では、2009年よりIHを含む様々な血管腫・血管奇形に対し、プロプラノロール療法を行ってきた経験をもとに、一般診療医が抑えておくべき知識と国内外のガイドライン¹⁾²⁾におけるプロプラノロールの位置づけについてまとめた。また筆者の研究班によって制作した「難治性血管腫・血管奇形 薬物療法研究班 情報サイト」内にそれぞれの疾患の診断、治療、また学会などの最新情報が掲載されているため、ぜひ、一度ご来訪頂きた

い (<https://cure-vas.jp/>)。

1. 乳児血管腫ってどんな病気？

IHは乳児期で最も頻度の高い、皮膚の良性腫瘍である。わが国での報告は0.8～1.7%とされているが、欧米のCaucasianにおける発生率は4～10%とされ、頻度が高い³⁾。また、女児(男児の2～3倍)、早期産児、低出生体重児に多い。

外観上、イチゴに似ているため、イチゴ状血管腫と呼ばれる。病型は表在型・深在型と混合型がある(図1)。表在型は最初、皮膚表面の紅斑のみであるが、増殖に伴い、隆起が強くなる(図2a～c)。基本的には面積、外周はそのままで横に広がることはなく、上に凸になるイメージである。一方、皮下に腫瘤がある場合は深在型と呼ぶが、表面のイチゴ状の所見がわからないため、診断に苦慮することもある。また、皮下の腫瘤と表在型が混合したタイプを混合型と呼び、皮下病変が増大すると隆起がさらに目立つこととなる。

図1 局在による分類



(難治性血管腫・血管奇形 薬物療法研究班 情報サイトより転載) 